

鹿踊りのはじまり

そのとき西 [にし] のぎらぎらのちぢれた雲 [くも] のあひだから、夕陽 [ゆふひ] は赤 [あか] くなゝめに苔 [こけ] の野原 [のはら] に注 [そゝ] ぎ、すすきはみんな白 [しろ] い火 [ひ] のやうにゆれて光 [ひか] りました。わたくしが疲 [つか] れてそこに睡 [ねむ] りますと、ざあざあ吹 [ふ] いてゐた風 [かぜ] が、だんだん人 [ひと] のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上 [きたかみ] の山 [やま] の方 [はう] や、野原 [のはら] に行 [おこな] はれてゐた鹿踊 [しゝおどり] りの、ほんたうの精神 [せいしん] を語 [かた] りました

そこらがまだまるつきり、丈高 [たけたか] い草 [くさ] や黒 [くろ] い林 [はやし] のままだつたとき、嘉十 [かじふ] はおぢいさんたちと北上川 [きたかみがは] の東 [ひがし] から移 [うつ] つてきて、小 [ちい] さな畑 [はたけ] を開 [ひら] いて、栗 [あは] や稗 [ひえ] をつくつてゐました。

あるとき嘉十 [かじふ] は、栗 [くり] の木 [き] から落 [お] ちて、少 [すこ] し左

[ひだり] の膝 [ひざ] を悪 [わる] くしました。そんなときみんなはいつでも、西 [にし] の山 [やま] の中 [なか] の湯 [ゆ] の湧 [わ] くとこへ行 [い] つて、小屋 [こや] をかけて泊 [とま] つて療 [なほ] すのでした。

天気 [てんき] のいゝ日 [ひ] に、嘉十 [かじふ] も出 [で] かけて行 [い] きました。糧 [かて] と味増 [みそ] と鍋 [なべ] とをしよつて、もう銀 [ぎん] いろの穂 [ほ] を出 [だ] したすすきの野原 [のはら] をすこしひつこをひきながら、ゆつくりゆつくり歩 [ある] いて行 [い] つたのです。

いくつもの小流 [こなが] れや石原 [いしはら] を越 [こ] えて、山脈 [さんみやく] のかたちも大 [おほ] きくはつきりなり、山 [やま] の木 [き] も一本一本 [いつぽんいつぽん]、すぎごけのやうに見 [み] わけられるところまで来 [き] たときは、太陽 [たいやう] はもうよほど西 [にし] に外 [そ] れて、十本 [じつぽん] ばかりの青 [あを] いはんのきの木立 [こだち] の上 [うへ] に、

少 [すこ] し青 [あを] ざめてぎらぎら光 [ひか] つてかかりました。

嘉十 [かじふ] は芝草 [しばくさ] の上 [うへ] に、せなかの荷物 [にもつ] をどつかりおろして、栎 [とち] と栗 [あわ] とのだんごを出 [だ] して喰 [た] べはじめました。

すすきは幾 [いく] むらも幾 [いく] むらも、はては野原 [のはら] いつぱいのやうに、まつ白 [しろ] に光 [ひか] つて波 [なみ] をたてました。嘉十 [かじふ] はだんごをたべながら、すすきの中 [なか] から黒 [くろ] くまつすぐに立 [た] つてゐる、はんのきの幹 [みき] をじつにりつぱだとおもひました。

ところがあんまり一生 [いつしやう] けん命 [めい] あるいたあとは、どうもなんだかお腹 [なか] がいつぱいのやうな氣 [き] がするのです。そこで嘉十 [かじふ] も、おしまひに杣 [とち] の団子 [だんご] をとちの実 [み] のくらゐ残 [のこ] しました。

「こいづば鹿 [しか] さ呉 [け] でやべか。それ、鹿 [しか]、来 [き] て喰 [け]」と嘉十 [かじふ] はひとりごとのやうに言 [い] つて、それをうめばちさうの白 [しろ] い花 [はな] の下 [した] に置 [お] きました。それから荷物 [にもつ] をまたしよつて、ゆつくりゆつくり歩 [ある] きだしました。

ところが少 [すこ] し行 [い] つたとき、嘉十 [かじふ] はさつきのやすんだところに、手拭 [てぬぐひ] を忘 [わす] れて来 [き] たのに氣 [き] がつきましたので、急 [いそ] いでまた引 [ひ] つ返 [かへ] しました。あのはんのきの黒 [くろ] い木立 [こだち] がちき近 [ちか] くに見 [み] えてゐて、そこまで戻 [もど] るぐらゐ、なんの事 [こと]

でもないやうでした。

けれども嘉十 [かじふ] はぴたりとたちどまつてしまひました。

それはたしかに鹿 [しか] のけはひがしたのです。

鹿 [しか] が少 [すくな] くとも五六疋 [ぴき] 、湿 [しめ] つぽいはなづらをずうつと延 [の] ばして、しづかに歩 [ある] いてゐるらしいのでした。

嘉十 [かじふ] はすすきに触 [ふ] れないやうに気 [き] を付 [つ] けながら、爪立 [つまだ] てをして、そつと苔 [こけ] を踏 [ふ] んでそつちの方 [はう] へ行 [い] きました。

たしかに鹿 [しか] はさつきの柵 [とち] の団子 [だんご] にやつてきたのでした。

「はあ、鹿等 [しかだ] あ、すぐに来 [き] たもな。」と嘉十 [かじふ] は咽喉 [のど] の中 [なか] で、笑 [わら] ひながらつぶやきました。そしてからだをかゞめて、そろりそろりと、そつちに近 [ちか] よつて行 [ゆ] きました。

一むらのすすきの陰 [かげ] から、嘉十 [かじふ] はちよつと顔 [かほ] をだして、びつくりしてまたひつ込 [こ] めました。六疋 [ぴき] ばかりの鹿 [しか] がさつきの芝原 [しばはら] を、ぐるぐるぐるぐる環 [わ] になつて廻 [まは] つてゐるのでした。嘉十

[かじふ] はすすきの隙間 [すきま] から、息 [いき] をこらしてのぞきました。

太陽 [たいやう] が、ぢやうど一本 [いつぽん] のはんのさの頂 [いたゞき] にかかりつてゐましたので、その梢 [こずゑ] はあやしく青 [あを] くひかり、まるで鹿 [しか] の群 [むれ] を見 [み] おろしてぢつと立 [た] つてゐる青 [あを] いいきものやうにおもはれました。すすきの穂 [ほ] も、一本 [いつぽん] づつ銀 [ぎん] いろにかがやき、鹿 [しか] の毛並 [けなみ] がことにその日 [ひ] はりつぱでした。

嘉十 [かじふ] はよろこんで、そつと片膝 [かたひざ] をついてそれに見 [み] とれました。

鹿 [しか] は大 [おほ] きな環 [わ] をつくつて、ぐるくるぐるくる廻 [まは] つてゐましたが、よく見 [み] るとどの鹿 [しか] も環 [わ] のまんなかの方 [ほう] に氣 [き] がとられてゐるやうでした。その証拠 [しどうこ] には、頭 [あたま] も耳 [みゝ] も眼 [め] もみんなそつちへ向 [む] いて、おまけにたびたび、いかにも引 [ひ] つぱられるやうに、よろよろと二足三足 [ふたあしみあし] 、環 [わ] からはなれてそつちへ寄 [よ] つて行 [ゆ] きさうにするのでした。

もちろん、その環 [わ] のまんなかには、さつきの嘉十 [かじふ] の柄 [とち] の団子

[だんご] がひとかけ置 [お] いてあつたのでしたが、鹿 [しか] どものしきりに気 [き] にかけてゐるのは決 [けつ] して団子 [だんご] ではなくて、そのとなりの草 [くさ] の上 [うへ] にくの字 [じ] になつて落 [お] ちてゐる、嘉十 [かじふ] の白 [しろ] い手拭 [てぬぐひ] らしいのでした。嘉十 [かじふ] は痛 [いた] い足 [あし] をそつと手 [て] で曲 [ま] げて、苔 [こけ] の上 [うへ] にきちんと座 [すは] りました

鹿 [しか] のめぐりはだんだんゆるやかになり、みんなは交 [かは] る交 [がは] る、前肢 [まへあし] を一本 [いつぽん] 環 [わ] の中 [なか] の方 [はう] へ出 [だ] して、今 [いま] にもかけ出 [だ] して行 [い] きさうにしては、びつくりしたやうにまた引 [ひ] つ込 [こ] めて、とつとつとつとつしづかに走 [はし] るのでした。その足音 [あしおと] は気 [き] もちよく野原 [のはら] の黒土 [くろつち] の底 [そこ] の方 [はう] までひゞきました。それから鹿 [しか] どもはまはるのをやめてみんな手拭 [てぬぐひ] のこちらの方 [はう] に来 [き] て立 [た] ちました。

嘉十 [かじふ] はにはかに耳 [みゝ] がきいんと鳴 [な] りました。そしてがたがたふるえました。鹿 [しか] どもの風 [かぜ] にゆれる草穂 [くさぼ] のやうな気 [き] もちが、波 [なみ] になつて伝 [つた] はつて来 [き] たのでした。

嘉十 [かじふ] はほんたうにじぶんの耳 [みゝ] を疑 [うたが] ひました。それは鹿 [し
か] のことばがきこえてきたからです。

「ぢや、おれ行 [い] つて見 [み] で来 [こ] べが。」

「うんにや、危 [あぶ] ないじや。も少 [すこ] し見 [み] でべ。」

こんなことばもきこえました。

「何時 [いつ] だがの狐 [きつね] みだいに口発破 [くちはつぱ] などさ罹 [かゝ] つて
あ、つまらないもな、高 [たか] で栎 [とち] の団子 [だんご] などでよ。」

「そだそだ、全 [まつた] ぐだ。」

こんなことばも聞 [き] きました。

「生 [い] ぎものだがも知 [し] れないじやい。」

「うん。生 [い] ぎものらしどごもあるな。」

こんなことばも聞 [きこ] えました。そのうちにたうたう一疋 [ぴき] が、いかにも決心
[けつしん] したらしく、せなかをまつすぐにして環 [わ] からはなれて、まんなかの方
[はう] に進 [すゝ] み出 [で] ました

みんなは停 [とま] つてそれを見 [み] てゐます。

進 [すゝ] んで行 [い] つた鹿 [しか] は、首 [くび] をあらんかぎり延 [の] ばし、四本 [しほん] の脚 [あし] を引 [ひ] きしめ引 [ひ] きしめそろりそろりと手拭 [てぬぐひ] に近 [ちか] づいて行 [い] きましたが、俄 [には] かにひどく飛 [と] びあがつて、一目散 [もくさん] に遁 [に] げ戻 [もど] つてきました。廻 [まは] りの五疋 [ひき] も一ぺんにはぱつと四方 [しほう] へちらけやうとしましたが、はじめの鹿 [しか] が、ぴたりととまりましたのでやつと安心 [あんしん] して、のそのそ戻 [もど] つてその鹿 [しか] の前 [まへ] に集 [あつ] まりました。

「なぢよだた。なにだた、あの白 [しろ] い長 [なが] いやづあ。」

「縦 [たて] に皺 [しは] の寄 [よ] つたもんだけあな。」

「そだら生 [い] ぎものだないがべ、やつぱり蕈 [きのこ] などだべが。毒蕈 [ぶすきのこ] だべ。」

「うんにや。きのごだない。やつぱり生 [い] ぎものらし。」

「さうが。生 [い] ぎもので皺 [しわ] うんと寄 [よ] つてらば、年老 [としよ] りだな。」

「うん年老 [としよ] りの番兵 [ばんpei] だ。ううはははは。」

「ふふふ青白 [あをじろ] の番兵 [ばんpei] だ。」

「ううははは、青 [あを] じろ番兵 [ばんべい] だ。」

「こんどおれ行 [い] つて見 [み] べが。」

「行 [い] つてみろ、大丈夫 [だいじやうぶ] だ。」

「喰 [く] つつがないが。」

「うんにや、大丈夫 [だいじやうぶ] だ。」

そこでまた一疋 [ぴき] が、そろりそろりと進 [すゝ] んで行きました。五疋 [ひき] はこちらで、ことりことりとあたまを振 [ふ] つてそれを見 [み] てゐました。

進 [すゝ] んで行 [い] つた一疋 [ぴき] は、たびたびもうこわくて、たまらないといふやうに、四本 [ほん] の脚 [あし] を集 [あつ] めてせなかを円 [まろ] くしたりそつとまたのばしたりして、そろりそろりと進 [すゝ] みました。

そしてたうたう手拭 [てぬぐひ] のひと足 [あし] こつちまで行 [い] つて、あらんかぎり首 [くび] を延 [の] ばしてふんふん鳴 [か] いでゐましたが、俄 [には] かにはねあがつて遁 [に] げてきました。みんなもびくつとして一ぺんに遁 [に] げださうとしましたが、その一疋がぴたりと停 [と] まりましたのでやつと安心 [あんしん] して五つの頭 [あたま] をその一つの頭 [あたま] に集 [あつ] めました。

「なぢよだた、なして逃 [に] げで来 [き] た。」

「噉 [か] ぢるべとしたやうだたもさ。」

「ぜんたいなにだけあ。」

「わがらないな。とにかく白 [しろ] どそれがら青 [あを] ど、両方 [りやうはう] のぶぢだ。」

「匂 [にほひ] あなぢよだ、匂 [にほひ] あ。」

「柳 [やなぎ] の葉 [は] みだいな匂 [にほひ] だな。」

「はでな、息吐 [いぎつ] でるが、息 [いぎ]。」

「さあ、そでは、気付 [きつ] けないがた。」

「こんどあ、おれあ行 [い] つて見 [み] べが。」

「行 [い] つてみろ」

三番目 [ばんめ] の鹿 [しか] がまたそろりそろりと進 [すす] みました。そのときちよつと風 [かぜ] が吹 [ふ] いて手拭 [てぬぐひ] がちらつと動 [うご] きましたので、その進 [すす] んで行 [い] つた鹿 [しか] はびつくりして立 [た] ちどまつてしまひ、こつちのみんなもびくつとしました。けれども鹿 [しか] はやつとまた気 [き] を落 [お]

ちつけたらしく、またそろりそろりと進 [すゝ] んで、たうたう手拭 [てぬぐひ] まで鼻
[はな] さきを延 [の] ばした。

こつちでは五疋 [ひき] がみんなことりことりとお互 [たがひ] にうなづき合 [あ] つ
て居 [を] りました。そのとき俄 [には] かに進 [すゝ] んで行 [い] つた鹿 [しか] が
竿立 [さをだ] ちになつて躍 [をど] りあがつて遁 [に] げてきました
「何 [な] して遁 [に] げできた。」

「氣味悪 [きびわり] ぐなてよ。」

「息吐 [いぎつ] でるが。」

「さあ、息 [いぎ] の音 [おど] あ為 [さ] ないがけあな。口 [くち] も無 [な] いやう
だけあな。」

「あだまあるが。」

「あだまもゆぐわがらないがつたな。」

「そだらこんだおれ行 [い] つて見 [み] べが。」

四番目 [よばんめ] の鹿 [しか] が出 [で] て行 [い] きました。これもやつぱりびくび
くものです。それでもすつかり手拭 [てめぐひ] の前 [まへ] まで行 [い] つて、いかに

も思 [おも] ひ切 [き] つたらしく、ちよつと鼻 [はな] を手拭 [てぬぐひ] に押 [お] しつけて、それから急 [いそ] いで引 [ひ] つ込 [こ] めて、一目 [いちもん] さんに帰 [かへ] つてきました。

「おう、柔 [や] つけもんだぞ。」

「泥 [どろ] のやうにが。」

「うんにや。」

「草 [くさ] のやうにが。」

「うんにや。」

「ござざい [ˊˊˊˊ] の毛 [け] のやうにが。」

「うん、あれよりあ、も少 [すこ] し硬 [こわ] ばしな。」

「なにだべ。」

「とにかく生 [い] ぎもんだ。」

「やつぱりさうだが。」

「うん、汗臭 [あせくさ] いも。」

「おれも一遍行 [ひとがへりい] つてみべが。」

五番目 [ばんめ] の鹿 [しか] がまたそろりそろりと進 [すゝ] んで行 [い] きました。

この鹿 [しか] はよほどおどけもののやうでした。手拭 [てぬぐひ] の上 [うへ] にすつかり頭 [あたま] をさげて、それからいかにも不審 [ふしん] だといふやうに、頭 [あたま] をかくつと動 [うご] かしましたので、こつちの五疋 [ひき] がはねあがつて笑 [わら] ひました。

向 [むか] ふの一疋 [ひき] はそこで得意 [とくい] になって、舌 [した] を出 [だ] して手拭 [てぬぐひ] を一つべろりと嘗 [な] めましたが、にはかに怖 [こは] くなつたとみえて、大 [おほ] きく口 [くち] をあけて舌 [した] をぶらさげて、まるで風 [かせ] のやうに飛 [と] んで帰 [かへ] つてきました。みんなもひどく愕 [おど] ろきました。

「ぢや、ぢや、噉 [か] ちらへだが、痛 [いた] ぐしたが。」

「プルルルルルル。」

「舌抜 [したぬ] がれだが。」

「プルルルルルル。」

「なにした、なにした。なにした。ぢや。」

「ふう、あゝ、舌縮 [したちぢ] まつてしまつたよ。」

「なじよな味 [あじ] だた。」

「味無 [あじな] いがたな。」

「生 [い] ぎもんだべが。」

「なじよだが判 [わか] らない。こんどあ汝 [うな] あ行 [い] つてみろ。」

「お。」

おしまひの一疋 [ぴき] がまたそろそろ出 [で] て行 [い] きました。みんながおもしろさうに、ことこと頭 [あたま] を振 [ふ] つて見 [み] てゐますと、進 [すゝ] んで行 [い] つた一疋 [ぴき] は、しばらく首 [くび] をさげて手拭 [てぬぐひ] を嗅 [か] いでゐましたが、もう心配 [しんぱい] もなにもないといふ風 [ふう] で、いきなりそれをくわいて戻 [もど] つてきました。そこで鹿 [しか] はみなぴよんぴよん跳 [と] びあがりました。

「おう、うまい、うまい、そいづさい取 [と] つてしめば、あどは何 [なん] つても怖 [お] つかなぐない。」

「きつともて、こいづあ大きな蝦牛 [なめくづら] の旱 [ひ] からびだのだな。」

「さあ、いぢが、おれ歌 [うだ] うだらはんてみんな廻 [ま] れ。」

その鹿 [しか] はみんなのなかにはいつてうたひだし、みんなはぐるぐるぐるぐる手拭 [てぬぐひ] をまはりはじめました。

「のはらのまん中 [なか] の	めつけもの
すつこんすつこの	柄 [とち] だんご
柄 [とち] のだんごは	結構 [けつこう] だが
となりにいからだ	ふんながす
青あをじろ番兵 [ばんぺ] は	気 [き] にかがる。
青あをじろ番兵 [ばんぺ] は	ふんにやふにや
吠 [ほ] えるもさないば	泣 [な] ぐもさない
瘠 [や] せで長 [なが] くて	ぶぢぶぢで
どごが口 [くち] だが	あだまだが
ひでりあがりの	なめぐぢら。」

走 [はし] りながら廻 [まは] りながら踊 [おど] りながら、鹿 [しか] はたびたび風 [かぜ] のやうに進 [すゝ] んで、手拭 [てぬぐひ] を角 [つの] でついたり足 [あし] でふんだりしました。嘉十 [かじふ] の手拭 [てぬぐひ] はかあいさうに泥 [どろ] がつ

いてところどころ穴 [あな] さへあきました。

そこで鹿 [しか] のめぐりはだんだんゆるやかになりました。

「おう、こんだ団子 [だんご] お食 [く] ばかりだぢよ。」

「おう、煮 [に] だ団子だぢよ。」

「おう、まん円 [まる] けぢよ。」

「おう、はんぐはぐ。」

「おう、すつこんすつこ。」

「おう、けつこ。」

鹿 [しか] はそれからみんなばらばらになつて、四方 [しはう] から柵 [とち] のだん
でを囲 [かこ] んで集 [あつ] まりました。

そしていちばんはじめに手拭 [てぬぐひ] に進 [すゝ] んだ鹿 [しか] から、一口 [ひ
とくち] づつ団子 [だんご] をたべました。六疋 [ぴき] めの鹿 [しか] は、やつと豆粒
[まめつぶ] くらゐをたべただけです。

鹿 [しか] はそれからまた環 [わ] になつて、ぐるぐるぐるぐるめぐりあるきました。

嘉十 [かじふ] はもうあんまりよく鹿 [しか] を見 [み] ましたので、じぶんまでが鹿

[しか] のやうな気 [き] がして、いまにもとび出 [だ] さうとしましたが、じぶんの大[おほ] きな手 [て] がすぐ眼 [め] にはいりましたので、やつぱりだめだとおもひながらまた息 [いき] をこらしました。

太陽 [たいやう] はこのとき、ちやうどはんのきの梢 [こずゑ] の中 [なか] ほどにかかるつて、少 [すこ] し黄 [き] いろにかゞやいて居 [を] りました。鹿 [しか] のめぐりはまだだんだんゆるやかになって、たがひにせわしくうなづき合 [あ] ひ、やがて一列 [れつ] に太陽 [たいやう] に向 [む] いて、それを拝 [おが] むやうにしてまつすぐに立 [た] つたのでした。嘉十 [かじふ] はもうほんたうに夢 [ゆめ] のやうにそれに見 [み] とれてゐたのです。

一ばん右 [みぎ] はじにたつた鹿 [しか] が細 [ほそ] い声 [こゑ] でうたひました。

「はんの木 [ぎ] の

みどりみぢんの葉 [は] の向 [もご] さ

ぢやらんぢやらんの

お日 [ひ] さん懸 [か] がる。」

その水晶 [すゐしやう] の笛 [ふえ] のやうな声 [こゑ] に、嘉十 [かじふ] は目 [め]

をつぶつてふるえあがりました。右 [みぎ] から二ばん目 [め] の鹿 [しか] が、俄 [には] かにとびあがつて、それからからだを波 [なみ] のやうにうねらせながら、みんなの間 [あひだ] を縫 [ぬ] つてはせまはり、たびたび太陽 [たいやう] の方 [はう] にあたまをさげました。それからじぶんのところに戻 [もど] るやびたりととまつてうたひました。

「お日 [ひ] さんを
せながさしよへば、はんの木 [ぎ] も
くだけで光 [ひか] る
鉄 [てつ] のかんがみ。」

はあと嘉十 [かじふ] もこつちでその立派 [りつぱ] な太陽 [たいやう] とはんのきを
拝 [おが] みました。右 [みぎ] から三ばん目 [め] の鹿 [しか] は首 [くび] をせはし
くあげたり下 [さ] げたりしてうたひました。

「お日 [ひ] さんは
はんの木 [ぎ] の向 [もご] き、降 [お] りでても
すすぎ、ぎんがぎが

まぶしまんぶし。」

ほんたうにすすきはみんな、まつ白 [しろ] な火 [ひ] のやうに燃 [も] えたのです。

「ぎんがぎがの

すすぎの中 [なが] さ立 [た] ぢあがる

はんの木 [ぎ] のすねの

長 [な] んがい、かげばうし。」

五番目 [ばんめ] の鹿 [しか] がひくく首 [くび] を垂 [た] れて、もうつぶやくやうにうたひだしてゐました

「ぎんがぎがの

すすぎの底 [そこ] の日暮 [ひぐ] れかだ

苔 [こけ] の野 [の] はらを

蟻 [あり] ても行 [い] がず。」

このとき鹿 [しか] はみな首 [くび] を垂 [た] れてゐましたが、六番目 [ばんめ] がにはかに首 [くび] をりんとあげてうたひました。

「ぎんがぎがの

すすぎの底 [そこ] でそつこりと

咲 [さ] ぐうめばぢの

愛 [え] どしおえどし。」

鹿 [しか] はそれからみんな、みぢかく笛 [ふゑ] のやうに鳴 [な] いてはねあがり、
はげしくはげしくまはりました。

北 [きた] から冷 [つめ] たい風 [かぜ] が来 [き] て、ひゆうと鳴 [な] り、はんの
木 [き] はほんたうに碎 [くだ] けた鉄 [てつ] の鏡 [かゞみ] のやうにかゞやき、かち
んかちんと葉 [は] と葉 [は] がすれあつて音 [おと] をたてたやうにさへおもはれ、す
すきの穂 [ほ] までが鹿 [しか] にまぢつて一しょにぐるぐるめぐつてゐるやうに見 [み]
えました。

嘉十 [かじふ] はもうまつたくじぶんと鹿 [しか] とのちがひを忘 [わす] れて、
「ホウ、やれ、やれい。」と叫 [さけ] びながらすすきのかげから飛 [と] び出 [ば] し
ました。

鹿 [しか] はおどろいて一度 [いちど] に竿 [さを] のやうに立 [た] ちあがり、それ
からはやてに吹 [ふ] かれた木 [き] の葉 [は] のやうに、からだを斜 [なな] めにして

逃 [に] げ出 [だ] しました。銀 [ぎん] のすすきの波 [なみ] をわけ、かゞやく夕陽 [ゆふひ] の流 [なが] れをみだしてはるかにはるかに遁 [に] げて行 [い] き、そのとほつたあとのすすきは静 [しづ] かな湖 [みづうみ] の水脈 [みを] のやうにいつまでもぎらぎら光 [ひか] つて居 [を] りました

そこで嘉十 [かじふ] はちよつとにが笑 [わら] ひをしながら、泥 [どろ] のついて穴 [あな] のあいた手拭 [てぬぐひ] をひろつてじぶんもまた西 [にし] の方 [はう] へ歩 [ある] きはじめたのです。

それから、さうさう、昔 [こけ] の野原 [のはら] の夕陽 [ゆふひ] の中 [なか] で、わたくしはこのはなしをすきとほつた秋 [あき] の風 [かぜ] から聞 [き] いたのです。

■このファイルについて

標題：鹿踊りのはじまり

著者：宮澤賢治

本文：「注文の多い料理店」

発行：大正十三年十二月一日

販売元：杜陵出版部／東京光原社

新選 名著復刻全集 近代文学館

昭和 51 年 4 月 1 日 発行

(第 14 刷)

表記：原文の表記を尊重しつつ、以下のように扱います。

○誤字・脱字等は、訂正せず底本通りとしました。

○本文のかなづかいは、底本通りとしました。

○旧字体は、現行の新字体に替えました。ただし、新字体に替えなかった漢字もあります。

新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。

○繰り返し記号／＼は用いず、同語反復としました。

入力：今井安貴夫

ファイル作成：里実工房

公開：里実文庫 2006 年 1 月 2 日